昔話の解釈

―今でもやっぱり生きている―

マックス・リューティ著
野村 泫訳

日文 701633472

昔話の解釈

—今でもやっぱり生きている—

マックス・リューティ著
野村　泫訳

福音館書店

武蔵野市立
0 05615
58.3. 15
図書館

日本財団支援
笹川良一記念文庫
財団法人日本科学協会

昔話の解釈—今でもやっぱり生きている—
一九八二年一二月一〇日　初版発行

訳　者　野村　泫
発　行　福音館書店
東京都千代田区三崎町一丁目一番九号
電話（〇三）二九二—三四〇一
振替東京一一七六四五
印　刷　精興社
製　本　小林製本

●落丁・乱丁本は、おとりかえいたします。
●NDC九〇一／二二四ページ／二〇センチ

SO LEBEN SIE NOCH HEUTE
Betrachtungen zum Volksmärchen
by Max Lüthi

© Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, Germany.
Japanese language edition published by Fukuinkan Shoten, Publishers, Inc., Tokyo 1982
Printed in Japan

まえがき

昔話の語り手が、「ふたり（主人公）は死んでいなければ、今でもやっぱり生きている」という、よく知られた句で話を結ぶとき、語り手は今語ったばかりの話を、皮肉なことに取り消しているのである。実際の出来事や現実の人間について語ったのではないぞ、ということを聞き手に合図で知らせているのである。けれども、その言葉には同時にまた別の響きもこもっている。つまり、昔話の登場人物はいつかどこかに生きていた実際の人間ではないが、だからこそ彼らは「今でもやっぱり生きている」のである。彼らは流れる時の外に立ち、人間の本質をあらわしているのである。昔話の筋の運びは心理と社会の事象、人の心の中の出来事と人と人との間の出来事を反映している。それは今も昔も、私たちすべてにかかわる問題である。昔話は人間および人間と世界との関係を形にあらわしたものである。

更にまた、この名高い結びの句は、現代では新しい意味を帯びてきている。この句は昔話の登場人物だけでなく、昔話そのものにも当てはまるのである。以前には昔話は大人たちの間で語られていた。口伝えに、世代から世代へ、国から国へと運ばれたものである。今日ではこうした口頭伝承は、ヨーロッパではほとんど滅びてしまった。けれども昔話はけっして死に絶えてはいな

い。文字に書き留められて今でもやっぱり生きている。グリム兄弟の「子どもと家庭のための昔話」は、ドイツ語で書かれた本のうち、最も多く外国の言葉に訳された書物である。この本のあとに続いて、数えきれないほど多くの昔話集が出版された。中には題名まで同じものもある。百年ほど前に出た、オットー・ズーテルマイスターの「スイスの子どもと家庭のための昔話」（一八六九年）がその例である。これらの昔話集には、同じ話型に属する話が次々と新しい変化形（バリエーション）で出てくる。そういう類話を比べてみると、ある話型に潜んでいる豊かな可能性が実によく分かる。いろいろと比べてみることが、個々の話の意義やある話型が全体として持つ意味を明らかにしてくれる。同じ型の話をほんのいくつか比べただけで、その話に内在している様々な発展の可能性と、隠れた目標の方向を悟ることがよくある。そういうわけで、この本では私たちは大抵の場合、最もよく知られたグリムの昔話から出発し、その独自性と普遍性をいっそうよく理解するために、ほかの話を参照することにする。取り上げた資料が秘めている豊かな力にはまったく驚かされる。それぞれの類話が人を新たな考察と理解に導いてくれる。

各章は、私が一九六八年の春、ドイツの放送局からシリーズで行なった講演に手を加えたものである。ただし最後の二章は、はじめ大要を、ミルチャ・エリアーデとエルンスト・ユンガーの編集する雑誌「アンタイオス」に載せたものである。「昔話の本質――むかしむかしあるところに――」（福音館書店）という題名で出た先の本と同じように、この本は、昔話がとにかく好き

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

で、昔話をめぐるさまざまな問題に興味を持っている方々のために書かれたものである。

一九六九年　春　　チューリッヒにて

マックス・リューティ

第二版のまえがき

第二版の本文は、若干の訂正を除けば、元のままである。「今でもやっぱり生きている」という題名（副題）からも分かるとおり、この本は「むかしむかしあるところに」という題名（副題）の本と対になるものであり、いわばその第二部である。この本は、前の本で扱った話に、広く知られている話型の解釈を付け加えたものである。昔話と伝説の立ち入った考察や文芸学的研究を求める方は最後のページに挙げてある私の著作を参照してください。

一九七六年　秋　　チューリッヒにて

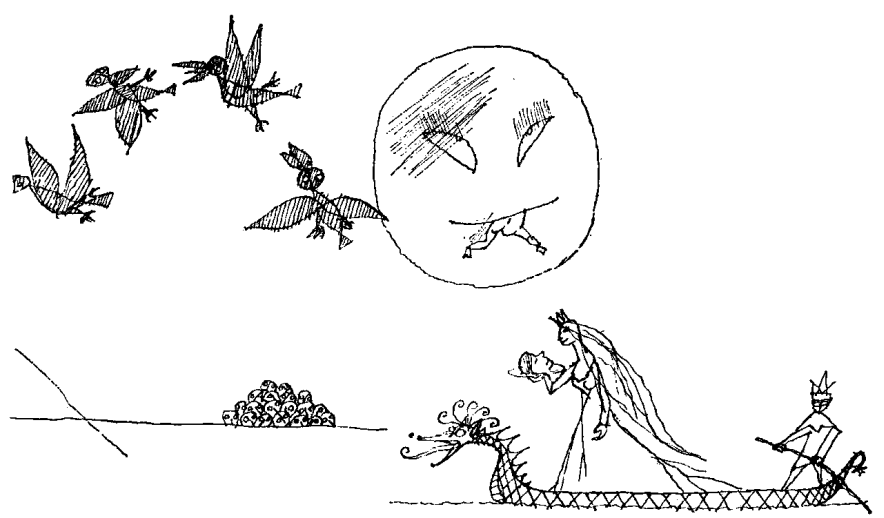
マックス・リューティ

昔話の解釈

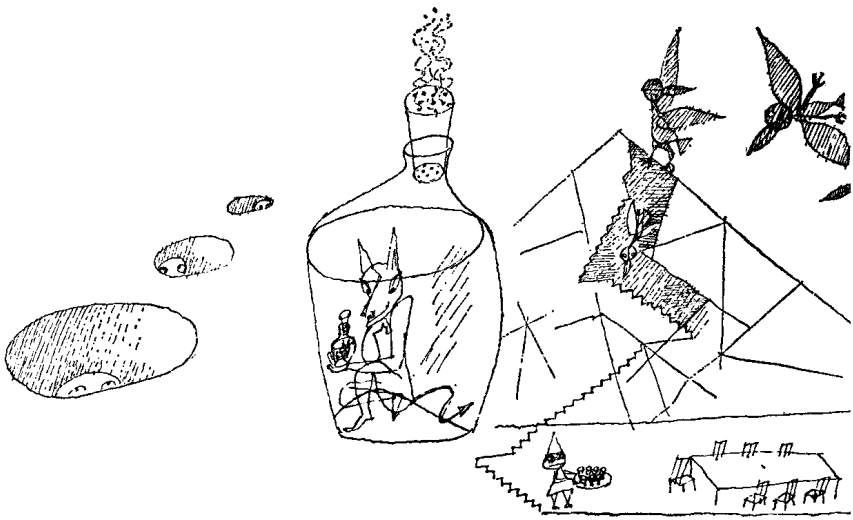
―今でもやっぱり生きている―

目次

まえがき
第二版のまえがき
第一章　七羽の烏（からす）……9
第二章　白雪姫……37
第三章　金の毛が三本ある悪魔……59
第四章　死人の恩返し……85



第五章　賢いグレーテル、仕合せハンス、賢いエルゼ……111
第六章　偽の花嫁と本当の花嫁、けもの息子とけもの婿……139
第七章　昔話に登場する人と物……161
第八章　昔話の語り口……185
参考文献
訳者あとがき
装丁　堀内誠一／カット　石川勇



本文中の＊印は各章の終わりの訳者注を見て下さい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　七羽の烏（からす）

七羽の烏の話はグリムのテキスト〔KHM 25〕*では、父親が生まれてきた女の子に急場の洗礼を施そうとして、七人いる息子のひとりに水を汲みに行かせる。すると、ほかの六人の男の子もいっしょに駆けていき、先を争って水を汲もうとしたので、つぼが井戸の中へ落ちてしまう。

男の子たちは、どうしたらよいのか分からず、そこに立ちつくしていた。誰ひとりとして家へ帰ろうとはしなかった。みんながいつまでたっても帰ってこないので、父親はいらいらして、こう言った。「きっとやつらはまた遊びにかまけて用事を忘れてしまったんだろう、しょうのない小僧どもだ。」女の子は洗礼を受けないままあの世へ行くことになるかもしれない、と父親は心配になってきた。そこで、腹立ちまぎれに、「小僧どもはみんな烏になってしまえ。」と怒鳴ってしまった。この言葉を言い終わったとたんに、父親は頭の上に羽ばたきの音を聞いた。空を見上げると、真っ黒な烏が七羽飛び去っていくのが見えた。

両親はその呪いを取り消すことができない。そのために両親のもとには娘しか残らないことに

なる。娘は成長して、日ごとに美しくなる。長い間娘は、自分に七人の兄があることを知らなかったが、ついにどういうことが起こったのかを知る。それからというものは娘の心は片時も休まらない。やがて娘は兄を捜しに出かけ、呪いを解こうとする。

娘がたずさえたものといえば、記念として両親の小さな指輪と、飢えをしのぐひと塊のパンと、のどの渇きをいやすひとびんの水と、疲れを休める小さな腰掛けだけだった。

さて、娘はずんずん歩いて、遠い世界の果てまできた。それから太陽のところへ行ったが、太陽は熱くて恐ろしかったし、小さな子どもたちを食べていた。娘は急いで逃げ出し、月のところへ行った。ところが、月はとても冷たくて、意地悪で残酷だった。月は娘に気づくと、「臭いぞ、人臭いぞ。」と言った。だから娘はあわてて逃げ出し、星のところへ行った。星たちはやさしくて親切だった。めいめい自分のいすに座っていた。やがて明けの明星がいすから立ち上がると、娘にひよこの骨を一本渡してこう言った。「この骨がないと、ガラスの山はあけられませんよ。そのガラスの山におまえの兄さんたちはいます。」

娘はその骨をもらい、しっかりとハンカチにくるんで、またどんどん歩き続け、とうとうガラスの山に着いた。門にはかぎが掛かっていた。娘が骨を出そうとして、ハンカチをひらいてみると、中はからっぽだった。娘は親切な星の贈り物をなくしてしまったのである。さあ、ど

うしたらいいだろう。娘は兄たちを助け出したかった。それなのにガラスの山のかぎがなかった。けなげな妹はナイフを取り出し、小指を切り落とすと、それを門にさし込んだ。すると首尾よく門があいた。娘が中へ入っていくと、小びとが出てきて、言った。「もしもし、何を捜しているんですか。」「兄さんたちを捜しているの、七羽の烏よ。」と娘は答えた。小びとが言った。「烏さんたちは今うちにいません。でも、帰ってくるまで待っているつもりなら、中へお入り。」それから小びとは烏の食べ物を七枚の皿にのせ、飲み物を七個のコップに入れて、運んできた。そこで妹はどの皿からもひと口ずつ食べ、どのコップからもひと口ずつ飲んだ。そして最後のコップにはうちから持ってきた指輪を入れておいた。

突然、空中にバタバタという羽ばたきの音が聞こえた。すると小びとが言った。「烏さんたちのお帰りです。」やがて烏たちがやってきた。めいめいの皿とコップを捜して、食べたり飲んだりしようとしたが、くちぐちに叫んだ。「誰がぼくの皿から食べたんだろう？　誰がぼくのコップから飲んだんだろう？　飲んだり食べたりしたのは人間の口だぞ。」七番目の烏がコップを飲みほすと、指輪が転がり出た。父母の指輪だということがすぐに分かった。そこで言った。「妹がここへきてくれますように。そうしたら、ぼくたちはみんな救われるのだ。」戸の陰で聞き耳を立てていた妹は、この願いを聞くと、その場に姿をあらわした。すると烏たちはみんな人間の姿に戻った。そこでみんなは抱き合い、口づけをし合った。そしていそいそと家路

についた。

グリム兄弟が縮*小語尾をたくさん使って、子ども向きの童話めいた口調で語っている、奇妙な烏の話の背後には、何が隠れているのであろうか。これは、まさに解釈を必要とする昔話のひとつである。だが昔話を解釈しようとする試みは勝手な思いつきであってはならない。ひとつひとつのモチーフをよく調べ、話の全体を同じ系統に属する話との関連から見極めなくてはならない。というのは、これはまっさきに言っておかなくてはならないことなのだが、七羽の烏の話はけっして孤立したものではなく、多くの国々に広まっている無数の似たような話のひとつにすぎないからである。グリム兄弟自身にしても、七羽の烏の話は、二つの異なった類話をつなぎ合わせて作っている。初めの部分はウィーンの話から取ったが、その後はマイン河畔の話に従っている。今日では伝説や昔話は、聞いたままをそっくりそのまま活字にするのが習わしであるが、グリム兄弟は異なった類話を組み合わせて一種の理想テキストを作っていることが稀ではない。そのわけは、グリム兄弟が「昔話は古い神話の名残である」と信じていたからである。ふたりは一語一語の言葉でなく、失われた神話そのものを重んじたのである。その神話のかけらがあちらこちらに散らばって光を放っているとふたりは考えた。だからこそときにはある話を別の話で補うようなことをあえてしたのである。グリムの昔話集にはあと二つ「七羽の烏」に似たような話が載っ

ている。「十二人の兄弟」〔KHM 9〕と「六羽の白鳥」〔KHM 49〕である。「十二人の兄弟」はヘッセンの話を二つ組み合わせて作ったものであり、「六羽の白鳥」はのちにヴィルヘルム・グリムの奥さんとなったドルトヒェン・ヴィルトが一八一二年にグリム兄弟に語ったものである。ヨハネス・ボルテとゲオルク・ポリーフカは「グリム兄弟の子どもと家庭のための昔話注解」の中で数多くの類話を挙げている。グリムの昔話集にもすでに烏と白鳥が出てくるが、そのほかの類話には更に次のようなたくさんの変身の例が出てくる――シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州ではのろしか、ジーベンビュルゲン〔北部ルーマニアの山地〕では豚、フランスでは羊と白い雄牛、ロシアでは狼と鷲、ポーランドではこうのとり、ハンガリアではがんと鶴、ノールウェイではあひる、イタリアでは鳩など。こうした動物への変身は何を意味しているのであろうか。いろいろとほのめかされていることをつなぎ合わせると、死の国へ入ることが考えられているようである。男の子が鳥に変わる、という例が一番多く出てくるが、鳥というのは霊魂の動物である。自然民族の信仰では、鳥は死んだ人間が変化した姿であるとされている。ほかの動物でもかまわないが、鳥にはそういう仮定がとりわけよく当てはまる。また鳥の中では烏が幅を利かせている。白鳥も稀ではない。白と黒は両方とも死の色である。烏は死体の鳥、あるいは死神のお供と見なされている。もうひとつのほのめかしは、いくつかの話では父親が実際に息子たちの死を願い、息子たちを殺す用意をしている、ということである。グリムの昔話集では十二羽の烏の話〔「十二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com